

T | Bach, Brandenburg Concerto No. 2 in F, First Movement

Y | 2020

M | 2つの額装したインクジェットプリント、

BWV 1047 に連動する4つのLEDライト

N | 2つの平面と照明は、それぞれヨハン・セバスチャン・バッハ作曲のブランデンブルク協奏曲第二番（以下、BWV 1047）の第1楽章にまつわるものである。平面の一つは楽譜であり、もう一方はノイズな画像にみえるかもしれない。それぞれの両肩では照明が明滅している。これらの要素はルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（以下、L.W.）の定義する「像」を意識している。とても大ぶかみの理解では、L.W. のいう像とは現実の模型である。現実を伝達・表現するときに僕たちは、現実それ自体を再現不可能なため、言語や音、絵などで表す。こうした翻訳をL.W. は現実の模型=「像」だという。つまり、ここで示されている要素はいずれも BWV 1047 の像であるといえる。僕たちは音楽を聴いて、心を震わせる。音を通じて、その圧力やテンポや雰囲気を感じて震えている。ただし、宇宙人が同様の感じ方をするとは限らない。音楽を目で聴く生命体もいるかもしれないし、全く想像することができない音楽の聴き方をするのだってありえる。その時、僕たちはその生命体がどのようにして音楽を享受しているのかさえ理解できないかもしれないけれど。

ここで「像」はあくまで可視的な表現に止まっている。それは今のところの僕の知覚と能力では、他の様々な「像」を表現できなかったためである。ただし、そこに限界はないのだ。だからこそ、まだまだ複数の方法で僕たちは「像」を結ぶことができると信じている。ちなみに、BWV 1047 はボイジャーに収録された「Music From Earth」からの引用である。ゴールデンレコードのカバーに記された音から画像をデコードする方法でBWV 1047 をエンコードした画像がAにあたる。

T | Odradek

Y | 2020-2021

M | 水性樹脂、光ファイバー、スタンドライト、LEDライト、

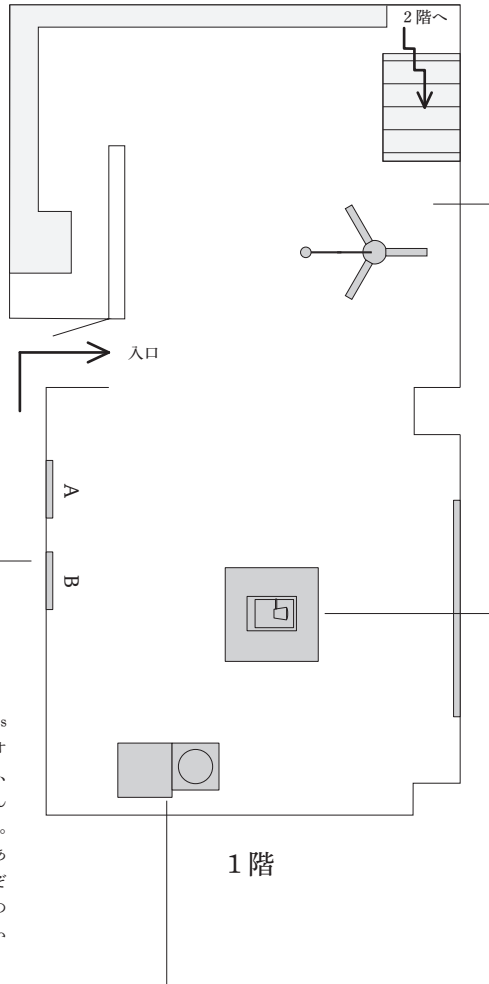
人感センサー LEDライト

N | フランツ・カフカの短編小説「父の気がかり」(Die Sorge des Hausvaters, 1915, 池内紀編訳, カフカ短編集, 岩波文庫, 1987) には、オドラデクという、おそらく生命体と思われるものが登場する。小説の中では、オドラデクについて色々な角度で描写がなされている。おそらくこれを読んだ人はオドラデクがどういったモノなのか、想像しながら読み進めるだろう。小説を読む上で自明のことかもしれないが、僕の頭に浮かんでいるソレとあなたのソレ、カフカのソレはきっと微妙に異なっているに違いない。それぞれのオドラデクが落ち葉がかさこ鳴るような笑い声を笑っている。一つのフィクションから無数のフィクションが構築される。きちんと伝達できていないということは、表現にとってはむしろプラスに働くこともままにある。

Exhibition map

*作品にはお手を触れないようにお願いいたします。

*撮影OKです。ただし、2階に展示の映像作品「METI」は写真・映像ともに撮影はご遠慮ください。



T | L - abor

Y | 2020-2021

M | 硬貨、紙コップ、モーター、歯付ベルト、アルミ、鉄、ステンレス、木、三脚、

人感センサー、人感センサーLEDライト

N | お金。それはフィクションであると同時に、私たちの重要なコミュニケーションツールでもある。宇宙では価値交換にどのようなツールが使われているのだろうか。地球上でも様々な価値交換の方法が永年にわたり模索されてきたが、2021年の世界では未だお金を介した資本主義が主流といえる。私たちの多くは労働の対価として金銭のやりとりをしているが、これからの世界では、その労働がロボットなどに置き換わることで失われる職が懸念されている。意識のないロボットの場合、直接的に自身に対価を得ずとも目的化された仕事を行うことができる。では、お金を得ることがとされているロボットとはどういったものであろうか、知能が発達したAIはお金をせびってくるかもしれない。その時、わたし達はAIの要望をさりとらして、お金以外の方法で何かを交換できるような有益なシステムを構築できるのだろうか。それにしても、ロボットの動作とはなんと健康に感じるものだ。

T | Decoder

Y | 2020

M | ゴールデンレコードにエンコードされた115の画像の音、振動スピーカー、アンプ、iPod classic、ファン、OHPプロジェクター、スクリーン、シリコンオイル、グリッターパウダー、アクリル、アルミ、鉄、クランプ

N | 1977年、ボイジャー1号・2号は、太陽系の外惑星と太陽系外の探索、およびSETI（地球外知的生命体探索）の任務を受け、宇宙に向けて打ち上げられた。2機のボイジャーは太陽系の天体に関する様々な探索を行い、2021年現在、ボイジャー1号は地球から最も遠い距離に到達した人工物として遥か彼方を飛行し続けている。ボイジャーにはSETIの実践として、地球の生命や文化の存在を伝える音や画像がアナログ信号で刻まれたレコードが搭載された。このレコードはゴールデンレコード（以下、GR）と呼ばれ、レコードの信号を地球外知的生命体が解読し、我々の存在に気づくことを期待したものである。GRとはまさにレコードそのものであり、記録された115枚の画像は、音声波として記録されている。レコードのカバーに刻印された記号を解読し、適切な方法でデコードできれば、音データを画像に置き換えることが可能になる。本作の振動スピーカーから流れてくる音は、画像からエンコードされた音である。このノイズのような音に画像の情報が詰まっているというわけだ。

地球外知的生命体は、GRを解読できるのだろうか。GRの解読方法には言語表現を用いていないとはいえ、解読に必要なエッセンスは地球独特の表現（例えば、説明には2進法が用いられている等）かもしれない。そもそもレコードという記録媒体が“いまここ”に特有のものである。文明や文化の異なる対象と何かを分かち合いたい時、僕たちは様々な表現の変換を工夫を凝らして練り上げる。特に対面がかなわなければそのハードルはどんどん高くなるだろう。僕たちは遠く離れた相手を想像しながら伝えようと苦心する（僕はボイジャープロジェクトを実現させた人々の熱意と技術、デザインにとっても感銘を受けています!!）。

形式や表現方法を変換することで伝達の濃度は変化する。これまでに理解しえなかった間柄であっても、何かを共有できたことで共に味わう多幸感というものがきっとある。宇宙という広大な領域においては、人類の知覚できる領域をはるかに超えた次元で、音の波紋や周波数からその「像」を結ぶことができる者達がいることも空想ができる。僕たちが認識することのできる限界を規定せず、その向こう側を想像するためのデコーダーである。

Exhibition map

*作品にはお手を触れないようにお願いいたします。

*撮影OKです。ただし、2階に展示の映像作品「METI」は
写真・映像ともに撮影はご遠慮ください。

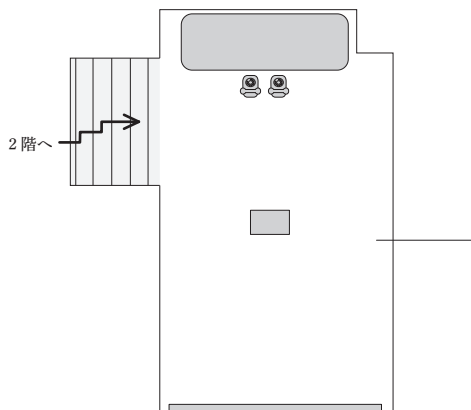
T : title

Y : year

M : material

D : duration

N : note



2階 (ロフト部)

*本作は Matterport ではご覧いただけません。

T | METI

Y | 2020-2021

M | ビデオ, ダイアル電話をリメイクした2つのモノラルスピーカー

D | 13分26秒

N | 映画を鑑賞する際、私たちは登場人物への感情移入という心的活動を行う。言い換えると、映画を通して多元宇宙の旅をすることができる。こうした心的な作用を生み出す映画を題材とし、「意識・感情」を記録することはできるだろうか。

■■■■■は失読症であることが知られている。失読症という状態は、その当事者以外には理解が困難な症状である。ただし、言語表現の限界が私たちの“認識”の限界（一語り得ないことについては、沈黙しなければならないールートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン）であるとするれば、失読症であることは言語の限界を打ち崩す可能性を秘めているとも言えるだろう。地球外文明との交流において、私たちが通常使用している文字記号による伝達は不可能かもしれない。この点において、失読症である■■■■■が体現する意識の葛藤は、私たちの意識の伝達不可能性と、他者との意識共有の限界とも重ね合わせられる。加えて、■■■■■は、断片的に繋がれた個々の映像内で、その映像世界内での自身の名前（役名など）を口にする。複数の映像を横断する■■■■■は「名前」という自己のシニフィアンの不安定さに苦悩する姿にも見えてくる。

多くの映像作品に出演する■■■■■は、自己分裂や自己認識における葛藤といった、自己の複数性に思い悩む人物を数多く演じてきた。（そもそも役者というものの性質には、自己の複数性が内包されている。）たとえば、■■■■■
■■■■■
■■■■■
■■■■■して奔走する。

本映像はこうした■■■■■という人物が映像世界内に生きる姿を重層的に編集し、引き裂かれた自己に葛藤する姿を描き出すとともに、私たちの自己認識の不安定さについても言及するための試みである。■■■■■が映像の中で演じる人物は、喜怒哀楽を表現し、苦悩を抱える姿としても映し出される。自己を見失いかけながら、複数の時空間を前進し、意識を体現していく。そのような■■■■■姿を映像内に立ち上げたいと思った。総じて、人々の意識の形容し難さと、地球外知的生命体■■■■■は■■■■■で■■■■■と名乗る地球外知的生命体を演じている）との交流に向けた、私たちの意識理解の可能性をヴィジュアル化する試みである。

YUKI TAKEUCHI SOLO EXHIBITON
AZUMATEI PROJECT #19

武内 優記 | SETI

期 間 | 2021年1月16日 - 2月14日（土日祝のみ）

開 場 | 1月/16(土), 17(日), 23(土), 24(日), 30(土), 31(日). 2月/6(土), 7(日), 11(祝), 13(土), 14(日).

時 間 | 14:00 - 18:00

会 場 | アズマテイプロジェクト（横浜市中区長者町 7-112 伊勢佐木町センタービル 3階）

アズ
マテ
イ